

コロナ禍における幼稚園・保育所の運動会の実態について

Study on the reality of Sports day at the Kindergarten and the Nursery School during the Spread of COVID-19

岡澤 哲子¹

OKAZAWA Tetsuko

本研究は、コロナ禍における幼稚園・保育所の運動会の実態を明らかにし、今後の課題を見出すことを目的として行われた。2022年12月から2023年1月の期間に、N県の公私立の幼稚園・保育所・認定こども園（以下、こども園）331園を対象に郵送法にて調査を実施した。回収数は205園、回収率は61.9%であった。そのデータの統計的結果は次の3点である。①「子どもたちは運動会を経て成長した」ことが最も得点が高かった、②「異年齢の交流ができた」と「2020年度や2021年度と比較して緩んできた規制の中で元に戻したことが多くあった」は最も得点が低かった、③全対象の幼稚園・保育所にとってコロナ禍であることが運動会に同じ影響を及ぼしていた。また、コロナ禍における運動会の実態に関する自由記述を含めた考察から、日常の保育の質の向上を目指すためには、運動会が何のためにあるのか根本的な検討をすることが必要であることが課題として示唆された。

1. はじめに

2020年をはじめから、世界中にCOVID-19が蔓延したことにより、日本においても大きな混乱が続いている。その中でもストップすることができない事の一つは「保育・教育」である。ワクチン接種が始まっても、長期間その接種対象にならなかった子どもたちが過ごし学ぶ幼稚園・保育園・こども園（以下、園所）では、今までになかった状況が目の前に次々と出現し、乳幼児期にふさわしい生活と学びを維持・保障することに全精力を注いでこられたと想像する。保育の質を考える基盤について、大豆生田（2021）は、「子どもを中心に、子どもの視点から保育を考える、つまり、「子ども主体」であるということです。」と述べている。2020年以来、園所ではそのような保育の質を保障しながら、コロナ禍での保育の工夫をしていくことになったのである。

コロナ禍において、「子ども主体」の視点から見て、多くの工夫が必要となった「園行事」のひとつに運動会がある。運動会は保護者も含めて大勢の人が一つの場所に集まって、接触も多く、呼吸も荒くなる場面が多く、感染リスクが高い行事である。

運動会は明治前期から小学校において就学奨励や意義の高揚などの目的のために行われたが、その小学校に付設された幼稚園もそれに参加するという形で幼稚園にも取り入れられ、大正年間には地域の運動会に参加して観衆の前で遊戯をする見せる運動会に変わっていき、昭和初期からは幼稚園単独で運動会をすることも見られるようになった（柴崎、2010）。このように、幼稚園が小学校の運動会に参加させてもらっていた歴史があることから、現在でも種目内容が小学校と類似している部分があるのではないかと考えられる。

また、運動会には、身体規律＝訓練化として、軍隊式の行軍と競技を行うことにより身体能力と意識の向上を図るという意味合いもかつてあり、一方で、地域の祭りとしての機能ももっており、文化的な行事でもあった（箕輪、2017）。しかし、今日の運動会では地域の祭りとしての意味は薄れており、幼児教育においては、運動遊びは目的なものであり手段的なものではないという「運動の教育」を前面に推し進めている。すなわち、運動会の意義は変わってきているのにもかかわらず、形式だけが残っている現状があるのではないかと考えられる。

幼稚園教育要領での「行事」に関する記載事項では、記載されている章こそ異なるが、「行事の指導に当たっては、幼稚園生活の自然の流れの中で生活に変化や潤いを与え、幼児が主体的に楽しく活動できるようにすること。なお、それぞれの行事についてはその教育的価値を十分検討し、適切なものを精選し、幼児の負担にならないようにすること。」という文言には平成元年の改定時から変更がない（金、2017）。平成元年からこのコロナ禍の運動会までの34年間において園行事における運動会で大事

¹ 帝塚山大学 教育学部 教授

にされてきたであろうことを再確認するべきであると考え。

運動会に関する先行研究としては、非日常的経験の側面（柏原、1990）、日常の保育に根ざした行事の側面（上坂元、1993；甲斐、2010；岡澤ら、2002）、子どもの主体性の側面（中村、2014；齋藤、2019）、保護者への情報発信の側面（清水ら、2003）、運動会後の子どもの遊びの側面（丸山ら、2011）など多様な側面からアプローチされてきている。

天野（2022）はコロナ禍にあって見直したこととして、「日常保育との関連で実施されることを考えると、普段の保育の充実こそが有意義な行事につながります。」と述べ、コロナ禍における行事に関する調査研究結果を示している。しかし、その調査は回答数が79と少ない上に、保育現場での運動会の実態を調査していない。また、猪熊（2021）は、園におけるコロナ禍の本質的な問題は感染者をゼロにすることではなく、「その時々状況に合わせて最善の保育を考え続けること」だと述べている。

そこで本研究は、コロナ禍における園（所）の運動会の実態を明らかにし、今後の課題を見出すことを目的として行われた。

2. 方法

1) 調査対象

N県の公私立の331園所に、調査用紙を郵送にて依頼し回答を郵送にて回収した。回収数は205園、回収率は61.9%であった。有効な回答があった園所数の内訳は表1の通りである。公立や私立の区別や在園児数が無記入であった3園の回答は有効回答に含めていない。

表1 有効回答であった園所数内訳

	幼稚園	保育所（園）	こども園	計
公立	55	31	37	123
私立	20	25	34	79
計	75	56	71	202

2) 調査項目

(1) 基本情報の質問項目

- ①公立か私立および園種（幼稚園・保育所（園）・こども園）
- ②年齢別在園児数（3歳未満児・3歳児・4歳児・5歳児）
- ③2020年度から2022年度までの運動会の名称の変化
- ④従来種目の取りやめ及び変更の有無

(2) 今年度の運動会に関する設問（3.4.5歳児のことを振りかえる回答を依頼した）

質問項目を表2に示した。回答方法は、設問番号1～13に関して、4点「非常にあてはまる」・3点「まあまああてはまる」・2点「あまり当てはまらない」・1点「全く当てはまらない」の4件法での回答とした。各設問に自由記述の欄も設けた。欄外に各年齢の出場種目と自由記述欄を設けた。

3) 調査時期：2022年12月～2023年1月

4) 統計処理：データ分析はIBM SPSS Statistics ver.25を使用した。

表2 設問の内容

1	練習のプロセスで子どもたちは意欲が高まっていた。
2	普段の遊びの集大成となった。
3	異年齢の交流ができた。
4	子どもたちは運動会を経て成長した。
5	運動会后、子どもたちの遊びへの積極性が高まった。
6	子ども達は達成感を感じていた。
7	運動会が何のためにあるのだろうかと保育者間で模索した。
8	各年齢の種目を決定するポイントが明確であった。
9	2020年度や2021年度と比較して緩んできた規制の中で、元に戻したことが多くあった。
10	練習・準備・当日など一貫して子どもの主体性を大事にできた。
11	今後コロナ禍が収束しても、このまま変えないだろうことが多くあった。
12	様々な変更に関して保護者の協力や理解が得られた。
13	保護者の方に満足していただけるよう最大限の工夫をした。
◎	各年齢の出場種目
◎	自由記述欄(コロナ禍の運動会だから、逆に『よかった!』こと、あるいは報われたこと など)

3. 結果と考察

1) 各設問の平均得点の比較

各項目平均得点を図1に示した。

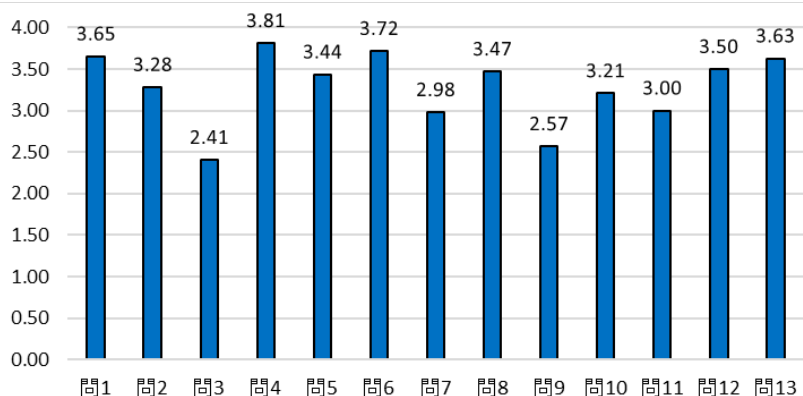


図1 各設問の得点平均

すべての設問項目間のt検定を行った。その結果、設問4「子どもたちは運動会を経て成長した」は、他のすべての設問と有意差があった。したがって「子どもたちは運動会を経て成長した」ことが最も得点が高かったといえる（表3）。また、設問3は設問9以外の設問すべてと有意差があり、設問9との間に有意差がなかった（表4）。同様に、設問9は、設問3以外のすべての設問と有意差があり、設問3とのt検定の結果、有意差がなかった（表5）。したがって「異年齢の交流ができた」と「2020年度や2021年度と比較して緩んできた規制の中で、元に戻したことが多くあった」は最も得点が低かったといえる。これらの結果からコロナ禍の運動会であったが、子どもたちが運動会を経て成長できたと振り返ることができた。しかし、異年齢の交流は達成しにくい状況であったことがうかがわれる。そして、2020年度や2021年度と比較して緩んできた2022年度の規制の中で元に戻したことが多いわけではなかったといえる。

表3 設問4のt検定

	平均値	標準偏差	標準偏差	自由度	有意確率 (両側)
問4 - 問1	0.158	0.594	0.594	201	0.000
問4 - 問2	0.530	0.799	0.799	201	0.000
問4 - 問3	1.406	0.905	0.905	201	0.000
問4 - 問5	0.376	0.764	0.764	201	0.000
問4 - 問6	0.094	0.587	0.587	201	0.024
問4 - 問7	0.832	1.102	1.102	201	0.000
問4 - 問8	0.342	1.410	1.410	201	0.001
問4 - 問9	1.243	1.256	1.256	201	0.000
問4 - 問10	0.604	0.871	0.871	201	0.000
問4 - 問11	0.812	1.634	1.634	201	0.000
問4 - 問12	0.312	0.689	0.689	201	0.000
問4 - 問13	0.183	0.706	0.706	201	0.000

表4 設問3のt検定

	平均値	標準偏差	t 値	自由度	有意確率 (両側)
問3 - 問1	-1.248	0.908	-19.533	201	0.000
問3 - 問2	-0.876	1.055	-11.799	201	0.000
問3 - 問4	-1.406	0.905	-22.074	201	0.000
問3 - 問5	-1.030	0.962	-15.221	201	0.000
問3 - 問6	-1.312	0.986	-18.913	201	0.000
問3 - 問7	-0.574	1.249	-6.536	201	0.000
問3 - 問8	-1.064	1.536	-9.849	201	0.000
問3 - 問9	-0.163	1.261	-1.841	201	0.067
問3 - 問10	-0.802	1.046	-10.893	201	0.000
問3 - 問11	-0.594	1.848	-4.568	201	0.000
問3 - 問12	-1.094	0.965	-16.112	201	0.000
問3 - 問13	-1.223	0.990	-17.556	201	0.000

表5 設問9のt検定

	平均値	標準偏差	t 値	自由度	有意確率 (両側)
問9 - 問1	-1.084	1.213	-12.707	201	0.000
問9 - 問2	-0.713	1.268	-7.988	201	0.000
問9 - 問3	0.163	1.261	1.841	201	0.067
問9 - 問4	-1.243	1.256	-14.060	201	0.000
問9 - 問5	-0.866	1.272	-9.677	201	0.000
問9 - 問6	-1.149	1.200	-13.600	201	0.000
問9 - 問7	-0.411	1.454	-4.017	201	0.000
問9 - 問8	-0.901	1.751	-7.315	201	0.000
問9 - 問10	-0.639	1.369	-6.631	201	0.000
問9 - 問11	-0.431	2.004	-3.054	201	0.003
問9 - 問12	-0.931	1.295	-10.215	201	0.000
問9 - 問13	-1.059	1.191	-12.638	201	0.000

2) 公立と私立の比較

各設問の平均値を公立・私立別に図2に示した。t検定の結果、すべての設問において公立と私立には有意差がなかった。したがって、公立と私立に関わりなく、コロナ禍であることが運動会に同様の影響を及ぼしていたといえる。

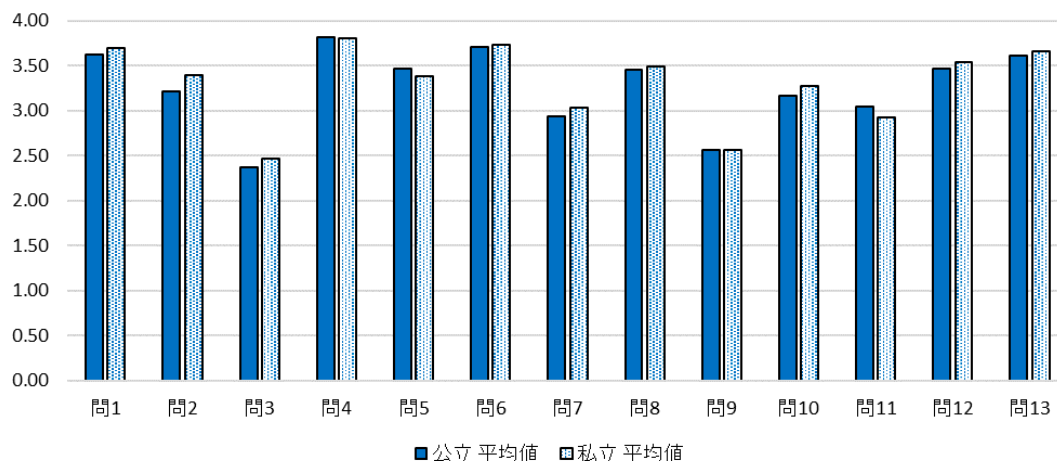


図2 公立と私立の得点比較

3) 園児数による比較

在籍園児数の違いによる質問項目への回答結果の比較分析のために、3歳児、4歳児、5歳児の在籍園児数合計の度数分布から、数が約33%ずつになるように3グループに分けて、一要因分散分析(3水準)を行った。小規模グループ3名~78名在籍園、中規模グループは81名~134名在籍園、大規模グループは137名~276名在籍園とした。その結果、すべての設問においてグループ間には有意差がなかった。したがって、園児の在籍数に関わりなく、コロナ禍であることが運動会に同様の影響を及ぼしていたといえる。各設問の平均値を在園時の規模グループ別に図3に示した。

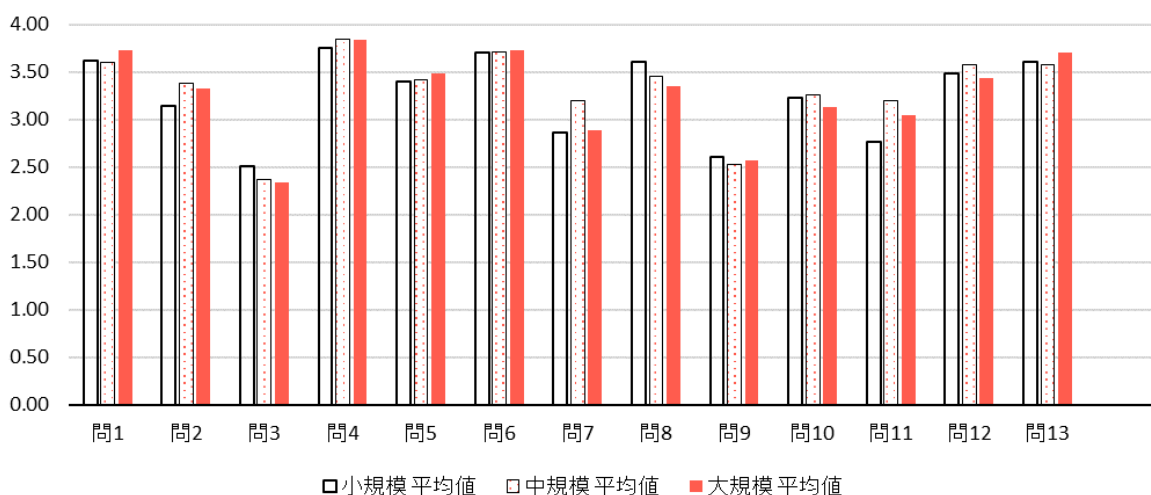


図3 在籍園児数による得点比較

4) 園種による比較

各設問の平均値を園種別に図4に示した

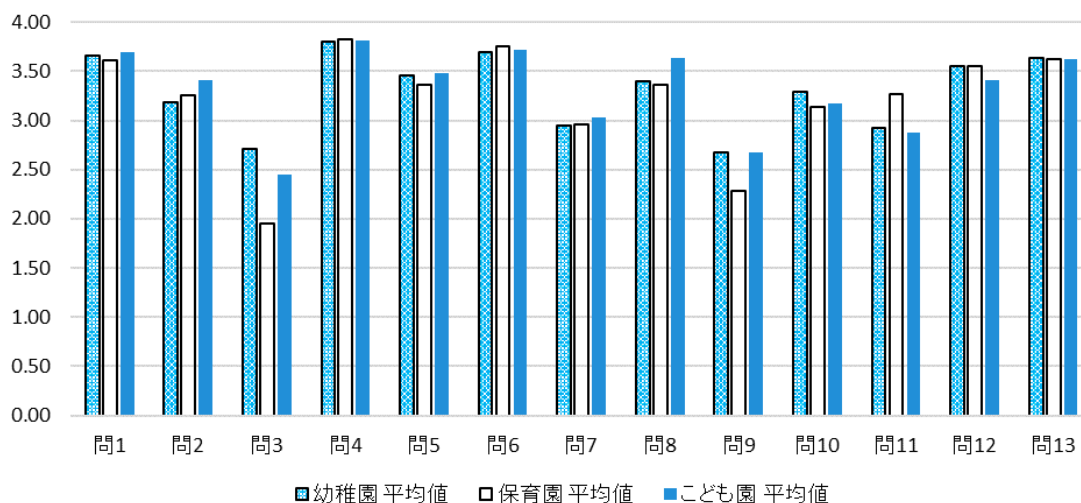


図4 園種による得点比較

一要因分散分析（3水準）の結果、設問3「異年齢の交流ができた」において、園種の効果が有意であった（ $F(2, 199) = 14.3, p < .01$ ）。表6はデータ表示である。

多重比較によれば、幼稚園と保育園の間と、こども園と保育園の間に有意差があった（ $MSe = 0.93, 5\%$ 水準）。しかしながら幼稚園とこども園の間は有意ではなかった（表7）。すなわち、幼稚園やこども園は保育園に比べて異年齢交流ができていると捉え、保育園では他の園種よりできていなかったと捉えていたことが分かった。

前述の3.1)で示した通り、「異年齢での交流ができた」という項目は、全質問の中で「最も得点が低かったことから、異年齢交流ができていないことが、保育者には運動会での大きなダメージだと意識されていると考えられる。すなわち、園所では異年齢交流は運動会のねらいの中に位置づけられていると言い換えてもよいと考えられる。また、保育園では「異年齢での交流ができた」の項目得点が高他の園種と比較して有意に低かったことから、日常の保育の中での異年齢での交流と比較すると運動会では交流ができていなかったと捉えていたのではないかと考えられる。

表6 データ表示

	幼稚園	こども園	保育園
平均値	2.71	2.45	1.95
度数	75	71	56
標準偏差	0.851	0.771	0.796

表7 多重比較の結果

	幼稚園	こども園	保育園
幼稚園		=	>
こども園			>
保育園			

不等号 $p < .05$ 等号 $n. s$

5) 自由記述の分類

(1) 設問3「異年齢の交流ができた」の自由記述の分類

園種における比較において、有意差があった設問3の自由記述を分類した。表8はその分類表である。表8が示すように、異年齢交流を運動会当日に限定してイメージしている記述と、運動会当日に限定しないでイメージしている記述とに分かれた。

前者では、運動会を学年別、クラス別に行ったことで異年齢の交流ができなかったとの回答が多かった。後者では、練習や応援で交流できた、運動会後の遊び（運動会の種目を真似する、教えてもらうなど）で異年齢の交流ができたとの回答が多かった。また、異年齢で合同種目を行ったとの記述もあった。全園種とも異年齢交流を運動会当日の種目の上での交流と捉えるだけでなく、運動会当日以外の異年齢交流も意識していることがわかった。自由記述の記述件数から見ると保育園よりもこども園や幼稚園の方が運動会当日以外の異年齢交流もイメージしている記述が多かった。前述の3.4)で保育園が「異年齢の交流ができていた」の得点が高他の園種より低かったのは、保育園で

は運動会当日以外の運動会と関連する異年齢交流への意識が他園種より低かったからかもしれない。

表 8 設問 3 の自由記述の分類

異年齢交流を運動会当日に限定した記述				異年齢交流を運動会当日に限定しない記述			
記述内容	幼稚園	保育園	こども園	記述内容	幼稚園	保育園	こども園
学年別・クラス別に行った	8	5	6	運動会後の遊びで交流	4	2	6
コロナのため	0	5	6	合同種目あり	8	1	2
種目としての交流はない	1	0	0	練習や応援で交流	3	3	9
その他	1	0	0	普段から交流している	1	0	2
合計	10	10	14	合計	16	6	19
総合計	34			総合計	41		

- (2) 設問 9 「2020 年度や 2021 年度と比較して緩んできた規制の中で、元に戻したことが多くあった」の自由記述の分類

設問 3 と同様、最も平均得点が低かった設問 9 の自由記述を分類した。表 9 が示すように、種目の内容を吟味して元に戻している園が多いことがうかがわれる。また、保護者の観覧人数を増やすなどの変更も見られる。

設問 9 は、前述の表 5 で示したように、得点が最も有意に低かった設問である。低い得点ではあるが、自由記述件数が多い。元に戻したことが多くはないが、園所でできる限りの工夫をしたことがうかがわれる。

表 9 設問 9 の自由記述の分類

記述内容	幼稚園	保育園	こども園
全学年で行う	9	4	9
種目内容の精選・種目数を減らす時間短縮・場所の変更	11	4	15
保護者	3	11	13
来賓の招待	1	0	1
意義やねらい	2	0	3
その他	0	0	1
合計	26	19	42
総合計	87		

- (3) 設問 7 「運動会が何のためにあるのだろうか」と保育者間で模索した」の自由記述の分類

表 10 の通り、この設問への自由記述は少なかった。また、図 1 で示したように得点は 2.98 で、有意ではないが設問の中でも低い方である。コロナ禍において運動会が何のためにあるのかを保育者間で模索するのではないかと予測であったが、結果はそうではなかった。根本的な模索がないまま、コロナ禍での工夫をした運動会を実施したと思われる。

- (4) 設問 11 「今後コロナ禍が収束しても、このまま変えないだろうことが多くあった」の自由記述の分類

この設問は、図 1 で示したように得点は、3.00 で有意ではないが低い方である。しかし自由記述は少なくはなかった。コロナ禍の状況がどのように今後どのように収束されるのかわからない中での回答であったからではないかと考えられる。

表 10 設問 7 「運動会が何のためにあるのだろうか」と保育者間で模索した」の自由記述の分類

記述内容	幼稚園	保育園	こども園
子どもに関すること	6	1	5
保護者に関すること	0	5	1
種目	0	1	0
意義やねらい	3	0	2
その他	4	3	2
合計	10	10	14
総合計	34		

表 11 設問 11 「今後コロナ禍が収束してもこのまま変えないだろうことが多くあった」の自由記述の分類

記述内容	幼稚園	保育園	こども園
学年・年齢別	5	12	7
種目内容の精選・種目数を減らす・時間短縮・場所の変更	11	5	9
保護者の観覧形式	4	0	3
開会式・閉会式の変更	1	1	2
来賓の招待なし	4	1	1
意義やねらい	3	0	0
その他	1	3	1
合計	29	22	23
総合計	74		

(5) ◎自由記述欄の分類

「コロナ禍の運動会だから、逆に『よかった!』こと、あるいは報われたこと など」について、最後の欄で記入された自由記述を表 12 にまとめて示した。

表 12 自由記述の分類

プラス面でのこと				マイナス面でのこと			
子ども主体	件数	保育者	件数	保護者	件数		件数
時短で、子ども達が集中でき、力を発揮できた、待ち時間がない	9	時間を短くする、種目数を減らすなど、学年で分けるなどみんなで作られたこと	7	保護者の観覧席ゆったり、くじ引き、アットホーム、直近で見られる、早朝の席とりなし、駐車場のトラブルなし	54	他学年の成長を見てもらえなかった	3
時間短縮で、3歳の子どもたちにとって無理がなかった	8	来賓への対応等の負担がなくなった(こもたちに向き合えた。間が空かない)	6	保護者が協力的であったこと、感謝の気持ち	4	地域のかたに見てもらえなかった	1
来賓がいなかったので子ども達がいつもの姿で参加できた	3	運動会を行う意味(子どもにと必要な経験とは何か)について職員間で検討することができたこと	3	来賓席がないので、保護者が子どもの近くで正面で見られた	4	コロナ禍の運動会でよかったことはない	1
年齢に応じた参加の仕方ができた	2	学年別だったので、保育者がフォローに入りやすい	3	親子競技が楽しくできた	2	祭りの部分がない	1
学年別で、子ども達が主体的に自己発揮できた 意欲をもってできた	2	子どもの成長をゆっくりと伝えることができた	2	準備物が少なくなった、役員の負担も減る	2	異年齢交流ができなかった	1
熱中症の時期、大幅な時短でよかった	2	小学生が来園しないので安全面でよかった	1	平日だったので、保護者のみにゆっくり見てもらえた	1		
保護者の手伝いが減り、子どもたちができることをしたこと	1	職員みんなで子どもを中心に、子どもの安心安全を考えて動けた	1	親子でコミュニケーションを取る余裕ができ、頑張り屋やる気を直接感じあえる時間がもてた	1		
親子で座って、そこから入場する。緊張せずにのびのびしていた	1	保護者と共に感染対策をしながら実施する工夫ができたこと	1				
学年での充実感は増した	1	自園の園庭でできた	1				

プラス面とマイナス面とに大きく分かれた。プラス面では、子ども主体に関する記述、保育者に関する記述、保護者に関する記述に分かれていた。

最も件数が多かったのは、プラス面での保護者に関することであった。学園別やクラス別にしたり観覧人数を制限したりしたことで、保護者の観覧席に余裕があり、またくじ引きなどもあり、早朝の席とりや駐車場のトラブルがないことが記述されていた。その結果アットホームな雰囲気になり、直近で子どもの様子を見てもらえたことが記述されていた。

次に件数が多かったのは、プラス面での子ども主体に関することであった。時短により、子どもが集中でき力を発揮できた・年齢に応じた参加の仕方ができた・緊張せずにのびのびできた・いつもの姿で参加できた・主体的に自己発揮できた 等の記述があった。

保育者自身にとっても、運動会の意味やねらいなど様々なことに関する保育者間での検討の時間が取れたり、当日に余裕をもって他のクラスをフォローできたりしたことがプラス面として記述されていた。また、子どもの成長をゆっくり伝えることができたという記述もあった。

マイナス面では、地域のかたに見てもらえなかった・祭りの部分がない、という従来の運動会のあり方にも関係すると考えられる記述もあった。また、異年齢交流ができなかったとか、他学年の成長を見てもらえなかったという運動会において大事であろうと思われる子ども主体に関する記述や保護者との連携に関する記述も見られた。

3. まとめ

本研究は、コロナ禍における園所の運動会の実態を明らかにし、今後の課題を見出すことを目的として行われた。

N 県の 331 園所を対象とした郵送による調査を行い、205 園から回答があった。回収率は 61.9%であった。コロナ禍における運動会に関する意識の高さがうかがえた。

13 の設問は、先行研究から得た運動会の意義や課題をまとめたうえで設定された。調査の結果データに統計的な処理をして明らかになったことは次の 3 点であった。

- ① 「子どもたちは運動会を経て成長した」ことが最も得点が高かった
- ② 「異年齢の交流ができた」と「2020 年度や 2021 年度と比較して緩んできた規制の中で元に戻

- したことが多くあった」は最も得点が低かった、
③ 全園所にとってコロナ禍であることが運動会に同じ影響を及ぼしていた。

自由記述の分類からは、次の4点が考えられた。

- ① 全園所とも異年齢交流を運動会当日の種目の上での交流と捉えるだけでなく、運動会当日以外の異年齢交流も意識していることがわかった。
- ② 2023年度では、種目の内容を吟味して元に戻している園が多いこと、また、観覧の保護者人数を増しているところが多いことが示された。
- ③ 根本的な模索がないまま、コロナ禍での工夫をした運動会を実施した園があったのではないか。
- ④ 保育者はコロナ禍の運動会のマイナス面よりもプラス面に意識が向いている。

以上の結果から、子ども主体の保育の質の向上のためには、コロナ禍における運動会の実態を振り返り、運動会が何のためにあるのか根本的な模索をすることが必要であること、さらに運動会のその日一日が活動の頂点として終わってしまわないように、日常の保育とのつながりの中で子ども達の学びを援助し続けることが必要であることが課題として明らかになった。

引用文献

- 天野珠路（2022）あらためて行事の意義を考える. 保育の友. 70（11）. 11-17.
猪熊弘子（2021）すこやかな育ちを守る危機管理の考え方. ベネッセ教育総合研究所 これからの幼児教育 2021年度 秋号. 3. <https://berd.benesse.jp/magazine/en/booklet/?id=5683>（最終閲覧 2023.1月1日）
金瑛珠（2017）保育における行事「運動会」のとらえ方の変遷と課題に関する一考察. 東京未来大学研究紀要. 11. 43-55
箕輪潤子（2017）戦前の幼稚園における運動会の教育的意義に関する一考察：保育雑誌『幼児の教育』の1930年代の記事から. 武蔵野教育学論集. 3. 33-41.
大豆生田啓友（2021）園行事を「子ども主体」に変える！. チャイルド社. 8.

参考文献

- 甲斐久美子（2010）“うんどうかい”から”運動会”へ. 幼児の教育. 105（10）. 101-110.
柏原栄子（1990）幼稚園における運動会の一考察 非日常的経験としての運動会. 日本保育学会大会研修論文集（43）. 114-115.
丸山久美子・土橋克子・宇賀神知子（2011）運動会を契機とした遊びの変化. 幼児の教育. 76（10）. 71-80.
中村春美（2014）自信や達成感を育てる運動会づくり. 福岡教育大学紀要. 63-6. 1-3.
岡澤哲子・土屋明子（2002）運動会が幼児の運動遊び場面における有能感に及ぼす影響. 甲子園短期大学紀要. 1. 35-45.
齋藤善郎（2019）子どもの主体的活動から生まれる幼稚園の運動会—絵本「ぐりとぐら」をテーマに—. 椋山女学園大学教育学部紀要. 12. 101-112.
柴崎正行（2010）なぜ幼稚園で運動会をするのか. 幼児の教育. 92（10）. 91-100.
清水益治・阿部直美・平化恵美子（2003）アンケートを通して運動会を振り返る. 日本保育学会大会研究論文集（56）. 774-775.
上坂元絵里（1993）運動会 日常の保育に根ざした行事として. 幼児の教育. 92（10）. 91-100.